

(2012年度山西大学奨学生レポート5月)

雲崗石窟の魅力

後藤千恵

5月になり、半袖で過ごす日も多くなりました。からりと晴れる日がほとんどで、あまり湿気がないので日本よりも過ごしやすく感じられます。

5月下旬に、私は山西省内の大同市に行ってきました。名前を聞いたことのある方もいらっしゃると思いますが、大同市は山西省の最も北に位置する市で、内モンゴル自治区と接しています。大同市は山西省第二の都市で、石炭などの資源が豊富なこともあり、セメント工場や火力発電所などがある工業的に発展した都市です。また、雲崗石窟や懸空寺、九龍壁などの貴重な文化財がのこされているため、近年観光業にも力を入れており、観光地や街並みの整備も積極的に行っています。

私の今回の旅行の目的はそれらの文化財を見に行くことでした。特に雲崗石窟は、敦煌莫高窟、竜門石窟と並ぶ中国三大石窟の一つで、西洋の文化と中国の文化との接点であり、仏教の伝播に関して重要な遺跡ということで興味がありました。今回はこの雲崗石窟についてレポートさせていただきたいと思います。

雲崗石窟は北魏の460年から494年頃に建造された石窟寺院で、岩肌をくりぬいて彫った仏像をそのくりぬいた洞内に安置しています。その仏像はパキスタン北部のガンダーラ地方を起源に持つガンダーラ仏の影響を色濃く受けているそうです。現在は世界文化遺産にも登録され、保存が進んでいますが、残念なことに多くの仏像や洞内の装飾が風化や盗掘で荒らされ、完全な状態のものはずかしか残っていないそうです。

実際にきちんと残っている仏像の顔を見ると、中国人らしい顔つきと言うよりも、はっきりと鼻筋の通った面長の顔をしているものが多く、着ている服についても、簡易化され模様のような服だけでなく、漢族風の厚めの服を着ている仏像も見られました。仏像のポーズも色々で、立っていたり、座禅を組むように座っているものもあれば椅子に腰かけているもの、また一つの小さな洞に二体の仏像がおさまっているものもありました。洞や仏像の大きさも多様で、手のひらよりも小さいものから15メートル以上もある仏像まで、それらの仏像がまた様々な大きさの洞におさめられています。

さらに洞の内部も見事としか言いようのない、多様で荘厳、また形式ばっておらず見る者を飽きさせない動きのある装飾が 360 度に施されています。仏教や美術史にそれほど詳しくない私でもとても楽しめ、1600 年前の仏教の世界に浸ることができました。機会がありましたらぜひ東西文化の一つの結節点である雲崗石窟をぜひ訪れてみてください。



「第 16 窟」と呼ばれる、もっとも初期に切り開かれた洞です。約 13 メートルの釈迦の立像と、左上には小さな無数の仏像が彫られています。立像の服装は、当時の漢化政策を反映して漢民族風となっています。



壁面に彫られていたものです。中心にある一つの洞に二体の仏像がおさめられているのは雲崗石窟の特徴です。風化が進んでいることもあって、何が彫られているのかは分かりませんが、仏教における一つの世界が表現されています。